

大隈重信と日本の精神衛生運動

岡田 靖雄

1.

大隈重信(1836-1922)は佐賀藩の砲術家の家にうまれた。佐賀藩は幕末において、立ち場のややあいまいな勤王方であり、そのなかで大隈は暴れん坊であり改革派であった。かれは長崎における代品方(交易担当)として藩政にたずさわった。最初の妻美登(江副氏)は故地をはなれることをこのまず、美登と離婚した大隈は1869年に三枝綾子と結婚した。維新後かれは主として外交および財政のことにたずさわった。1881年には国会開設意見書を提出したが、政変で参議の地位をおわれた。明治政権にあってかれは中軸にはおらず、周辺にもちかい改革派であった。

翌年には立憲改進黨を結成して、その総理となった。東京専門学校を開校したのも同年で、これが1901年には今の早稲田大学となった。1888年には外務大臣となって条約改正にとりくんだが、翌年には大隈外相の路線を手ぬるしとする玄洋社員に爆弾をなげつけられて、膝上から右脚を切断せざるをえなくなった(執刀佐藤進)。前東京府癲狂院長の中井常次郎は当時、外務大臣官舎医務嘱托で、このときの治療にもあたった。

このうち大隈は、1898年、1914-16年と2度にわたって首相をつとめた。また早稲田大学の経営、『開国五十年史』の刊行(1907年)、大日本文明協会設立(1908年)など、晩年の大隈は文化運動にもおおきくとりくんだ。かれは人生125年を主張したが、満83歳で胆石症によりなくなった。国民葬としておこなわれたその葬儀には30万人が参列し、葬列沿道の人出は150万人と報道された。国民的政治家としての大隈の声望が察しられる。

2.

精神病患者慈善救治会(のち精神病患者救治会、救治会と改称)については、「精神病患者慈善救治会

のこと——呉秀三先生伝記補遺(その一)——」(日本医史学雑誌, 第32巻第4号, 1986)にくわしくのべた。この会は、呉秀三が留学中にドイツの精神科病院の患者救護会をしり、また帰国後に婦人中心の衛生会や慈善団体に接して、おもいたったものである。1902年に呉夫人皆子の主唱で発足し、医科大学教授や名流医家の夫人を中心の会員とし、男は賛助員であった。幹事、評議員も女で、呉秀三をふくむ男は顧問となっていた。

精神病患者慈善救治会は一般に精神衛生運動団体に分類されるが、精神衛生啓蒙はこの会の一面にすぎなかった。その活動の実態をみると、初期には東京府巢鴨病院の外郭団体としての色彩がこく、患者への慰安・慈善的贈り物、病院活動への支援が中心であった。のちには対象となる病院は東京府下の全精神科病院にひろがり、さらに全国化しようとしていた。活動内容も、施設建設、相談・外来事業、公費入院実現までの入院費負担、退院患者帰郷旅費支給などにもおよんだ。

なかでも、関東大震災後には東京府立松沢病院の敷き地内に救護所をもうけ、神田駿河台には精神病患者相談所をもうけて、ここでは無料診療、通院作業もおこなった。さらに小金井に、今日のリハビリテーション施設にあたる収容所を建設したが、病院の規格に達しないので、開所にはいたらなかった。

施設設立の面でおおきかったのは、東京帝国大学医科大学精神病室の設立である。医科大学の精神病学教室は1887年から東京府巢鴨病院におかれていた。大学構内の精神科診療施設は片山國嘉教授以来の切願であったが、“気遣いは大学構内にいれない”と青山医科大学長は明言していた。1914年になって、皮膚科に接して精神科外来診療所ができた。そして1916年に12床の精神病室ができたのは、精神病患者慈善救治会の寄付による。治療4床の数年分の費用も会が負担した。

救治会は1943年に、日本精神衛生協会、日本精神病院協会とともに精神厚生会に統合された。戦後に発足した日本精神衛生会は、日本精神衛生協会とともに救治会をもうけているといわれるが、救治会を精神科関係社会事業団体と規定すれば、救治会は戦後には復活せずにおわったとみるべきだろう。

3.

呉秀三の兄文聰^{あやとし}は1882年に立憲改進黨結成に呼応して、広島立憲改進黨を結成して、大隈およびその側近と交流があった。早稲田大学学長鳩山和夫（今の鳩山由紀夫ら兄弟の曾祖父）は1903年から精神病患者慈善救治会の顧問であり、またのちに呉の従兄菊池大麓の娘は鳩山の2男秀夫の妻となっている。また、呉の1年上級の医科大学耳鼻咽喉科学教授岡田和一郎は、自分が大隈に相談して夫人に会長になってもらった、とのべている。

大隈綾子（1854-1923）は、1905-17年と精神病患者慈善救治会の会長であり、上記医科大学精神病室がつくられたのは大隈会長時代である。病室建設当時の会の『庶務日誌』がのこっていて、大隈会長名の病室落成式への案内、式次第もそれにはられている。役員会はしばしば大隈邸でひらかれ、会の園遊会もすくなくとも2回大隈邸でもよおされた。1906年の幹事増員のさいには、鳩山和夫妻春子、高田早苗妻不二子、天野爲之妻多喜子が評議員から幹事になった。鳩山、高田、天野はいずれも大隈側近であった。

大隈会長の辞任後会長はしばらく空席であったが、1919-23年と会長をつとめたのは、大隈の養子信常の妹、松浦伯爵家出身の子爵母堂・松井正子（1876-1948）である。1924年に神田駿河台に精神病患者相談所ができたのは、松井前会長の好意で敷き地がかりられたからである。

1931年までの救治会への寄付金38,000円ほどのうちで、個人最高額は大隈熊子（重信娘）の1,600円で、大隈夫妻850円、松井正子317円となっている。

大隈は精神科病談話会ほか精神病患者慈善救治会関係の会合で何回か演説している。1916年の精神病室落成式にも、当時の大隈首相が出席し、演

説した。これらのなかで大隈は2回、弟の精神病に言及している。1911年巣鴨病院での園遊会のさいには、患者をまえに“同情演説”をした。その演説の筋はあまり論理的ではないが、社会も政治も精神病になる、などとのべて、精神病学の重要性をといている。

このように大隈重信は、日本最初の、世界的にもかなりはやい精神衛生団体である精神病患者慈善救治会にふかい肩入れをした、最大のパトロンであったといつてよい。

大隈の会へのかかわりは『図説日本の精神保健運動の歩み—精神病患者慈善救治会設立100年記念—』（日本精神衛生会・東京、2002）も、おおきくとりあげている。

4.

戦前の政治家のなかで大隈とならんで想起されるのは、後藤新平（1857-1929）である。水沢にうまれた後藤は須賀川医学校を卒業して、愛知県病院長・愛知県医学校長をつとめたのち、内務省に出仕して衛生局長にまでなり、ついで台湾民政長官、南満鉄道総裁、通信大臣、内務大臣、外務大臣、東京市長、帝都復興院総裁などを歴任した。

後藤は大隈より19歳下だが、二人にはかなり共通したものがある。大隈は“早稲田の大風呂敷”と称され、後藤も“大風呂敷”と称された（杉森久英による後藤伝は、まさしく『大風呂敷』の題である）。後藤はもともと医者であり、大隈も医学の道をすすめられたことがある。ともに大衆にうったえた人であり、体制内改革派であった。

2007年は生誕150年で後藤新平記念行事がさかんで、伝記も復刻された。しかし、後藤の精神科医療とのかかわりは注目されなかったようである（後藤のこの面については、岡田靖雄・吉岡眞二「相馬事件をとおしてみた後藤新平」、医学史研究、第19号、1966、がある）。おなじ2007年に早稲田大学は創立125年をむかえたし、本年は大隈生誕170年になる。

後藤ははじめ愛知県病院でA. v. Roretzから精神科医療、裁判医学につきおしえられ、それらにつきいくつかの提言をし、またRoretzによる癲狂室設立にも関与した。論文「癲癲の制」（1890年）は、

この分野でのもっともはやい論文の一つである。相馬事件とは、旧相馬藩主相馬誠胤の精神病発病(今日の統合失調症であろう)・監禁・入院・死亡をめぐって、相馬家側と錦織剛清ら旧藩士の一部とがあらそったものである。殿様は精神病ではなく、問題は相馬家の財産をねらう陰謀だ、と主張する錦織に後藤は加担し、瘋癲人の権利擁護を主張した。錦織が1887年に相馬を東京府癲狂院からつれだしたときに、相馬をまづつれていったのは後藤邸で、後藤は相馬を精神病ではないとみとてた。

医界肅正の熱意にもえていた後藤は、相馬を精神病とした岩佐純の診断書は診察せずにかかれたものであると主張し、また先天性鎖陰症の女をめとらせて相馬を狂気においやったと主張する錦織に同調して、相馬夫人は陰閉鎖症であると公言した。岩佐はもともと相馬家主治医で、このときは弟子に診察させたことがつたえられている。相馬夫人には代償月経があったらしいが、発病まで結婚後数年は相馬と夫人との仲はよかったらしい。いずれにせよ、夫人主治医からききだしたにせよ、個人の秘密に属することを公言するのは、医師としての道義に反することである。

相馬は1892年に糖尿病で死亡した。翌年に錦織は相馬家側の何人かを毒殺のかどで告訴し、相馬家側は錦織を誣告で告訴した。後藤は錦織に3,000円の援助をした。謀殺事件は免訴となり、後藤は誣告共謀で拘束され、前年についていた衛生局長の職を辞した。錦織は有罪となったが、後藤は1894年に控訴審で無罪が確定した。後藤は

やがて衛生局長に復帰したが、ついで一般行政面に転じた。

後藤は1916-18年と内務大臣であった。この間に精神病院法案の準備がすすめられた。1918年に齋藤紀一代議士(齋藤茂吉の養父)の質問にたいし、“精神病者取締ノ完否ハ社会ノ安寧秩序維持ニ至大ノ関係ヲ及ボス故ニ、政府ニ於テハ、特ニ細心ノ注意ヲ払ヒ以テ之ガ遺憾ナキヲ期セリ……近クソノ結果ニ基キ現行法規ニ適當ノ改正ヲ加ヘントス”との答弁書をだしている。そこには、かつて瘋癲人の権利擁護をさげんだ青年医師の姿はない。そして後藤は1923年に内務大臣となったが、年末におこった虎の門事件のために山本内閣は総辞職した。呉は犯人難波大助を精神病ではないと鑑定したが、それまで世論は難波を精神病とみなそうとしていた。

後藤の姿勢は、精神病者のためにから、精神病者の側にたつかにみえて他罰的なものに、そして最後には完全に体制維持の側にうつった。大隈の態度は後藤ほどに鮮鋭ではないが、精神病者慈善救済会の大パトロンとなり、弟の精神病のことも公言して精神病学の重要性をといた。

日本では、身内の精神病はかくされる。大正王(天皇)嘉仁の病気はあきらかにされないままでいるが、進行麻痺であったようにつたえられている(この秘匿は断種法論議に目にみえぬおおきな影響をおよぼしたようである)。この点で、大隈の態度はじつにみあげたものであった。

(平成20年1月例会)